

## 福音書の政治的背景

バシル・ムーア、1983年

### 政治情況

パレスチナ王国が古代ローマの支配に下ったのは、ポンペイウスがエルサレムを攻略した紀元前63年である。古代ローマの属州となってから最初の頃は、大祭司の家系であるハスモン家が引き続いて支配をまかされたが、この動乱に満ちた、派閥間の争いが横行する州を統治する能力が無いことが明らかになって、ユリウス・カエサルは紀元前47年にアンティパトロスをユダヤ地方の行政官に任命した。アンティパトロスはイドマヤ人（エドムのギリシャ語名）、すなわち紀元前109年にヨハネ・ヒルカヌスによって強制的にユダヤ教に改宗させられた南部のアラブ族の出身であった。アンティパトロスが死去した紀元前43年、彼の息子ヘロデは国外へ退去しなければならず、非常に多くの彼の追従者と同じようにローマへと向かった。彼はそこで、アントニウスに続いてアウグストゥス自身の恩寵を得た。古代ローマでは直接統治よりも従属する国王を通じた支配が好まれたので、ヘロデは紀元前40年に「ユダヤ王」に任命された。しかしこの称号は、ローマの支援を全く受けずにその属州の支配確立に努める権利を得たという意味に過ぎなかった。彼は少人数の忠臣一団を引き連れてパレスチナに戻り、紀元前37年までにエルサレムに自分の王国を築いた。

ヘロデ大王は歴史上最も好ましい支配者とはいえないが、古代ローマ人からすれば大成功を収めた人物であった。彼はあらゆる潜在的なライバルを、最初の妻ミリアム（ハスモン家最後の正式な統治者であるヨハネ・ヒルカヌスの孫）や彼女との間にもうけた二人の息子を含めて、無情に排除した。アウグストゥスはこの件に対して、「私は、ヘロデの息子の雌豚よりもむしろヘロデ自身の雌豚になりたいものだ」と皮肉ったといわれる。しかしヘロデはパレスチナ丘陵の山賊をも討伐して、交易および繁栄をはるかに揺るぎないものとした。そのうえ、エルサレムに古代ユダヤ王国の神殿を再建することで彼らの観心を買った。彼が残虐で無慈悲な支配者であったことは疑いようもないが、おしなべて言えば、古代ユダヤ王国の民と古代ローマ人との間の調停者の役割を果たすことに成功し、その過程で莫大な私有財産をため込んだ。パレスチナでは、ア

ウグストゥス支配下での平和を彼が死去する紀元前4年まで繋ぎ留めることができた。しかし、彼の無慈悲な統治が民衆の強い憤りを広く駆り立てるにつれ、一触即発で反乱が起きる状態にまで陥っていた。

ヘロデは、有史以来パレスチナの政治の舞台に踊り出た最初の主要人物である。彼はイエス生誕を間近にして死去するが、彼の死は古代ローマ人にとっては悪い知らせであり、古代ユダヤ王国と彼の家族は混乱状態に陥った。

### ヘロデの死とその継承

ヘロデは、ローマ皇帝の同意を得た最後の意志として、自分の王国を主要な3部分に分割した。これはおそらく、自分の長子を殺してしまったために残った息子たちが未だ幼く、彼らがこのような重要な地域を継承することをアウグストゥスは決して承認しないと考えたからであろう。彼はイドマヤ、ユダヤおよびサマリアをサマリア人の妻との間にもうけた18才の息子、アルケラオスに与えた。アルケラオスの実の兄弟であるアンティパスには、北部のガリラヤおよびヨルダン川東岸のペレアを与えた。ガリラヤ湖の北東領域は、彼らの異母兄弟フィリポに与えた。並外れた金持ちであったヘロデは莫大な金銭をもその他の家族、ローマ皇帝および軍隊に与えた。この軍隊はおそらくはヘロデに感謝して、アルケラオスを彼らの新しい王として歓迎するべく殺到した。賢明にも、アルケラオスは彼らにローマ皇帝の承認を待つように忠告したが、愚かなことには彼らの忠誠に対して報酬を約束しだした。

これは、多くの人々が待望していたきっかけであった。すぐに税の軽減、嫌悪の的であった購入税の廃止、ヘロデにより投獄されたあらゆる政治囚の解放を求める民衆の声が高まった。アルケラオスはこれらの要求に応じた。これらの成功に勇気づけられて、民衆はより多くの譲歩を要求しようと決心した。彼らは政治囚の釈放以上のことを要求し、また、ヘロデの寵臣に身のほどを思い知らせること、特に、ヘロデが任命した大祭司ヨアザールの退位を欲した。民衆は神殿で展開された示威行動の際に要求を行なった。この時神殿では、神殿に押しかけてヘロデが第二の戒律を無視して門の一つに建てた古代ローマのワシの紋章を破壊したかどで彼の死の直前に処刑された、何人かの敬虔かつ民族自決主義的な考えの殉教者を民衆が哀悼していた。

気の毒なアルケラオス青年は何をすべきか知らなかった。彼は群衆を鎮めるために最初に神殿長官を、続いて他の役人を送って彼らを説得しようとした。

しかし、群衆はこれらの使者に話しをさせようとはせず、話しを聞くどころか彼らに石を投げつけた。さらに悪いことには、過越の祭りの時期で全国各地からの巡礼者が神殿に押し寄せていた。これらの農民の多くはすぐに説得され、反乱者たちの大義に参加した。急速に収拾がつかなくなりつつあり、アルケラオスは行動を起こさざるを得なかった。彼は大部隊の兵士を神殿に送って首謀者たちを逮捕しようとした。大半の兵士が殺されたため、アルケラオスは駐屯隊全体を投入して、神殿を包囲することに成功し、内部にいた反乱者および参拝者たちを投獄した。約3千人が殺され、残り的人々は逃散した。

新体制下での最初の過越の祭りは、このような結末となった。この出来事は、古代ユダヤ人の民族主義が勃興する直前でいかに激しいものであったか、そして従属した王を通じた古代ローマの支配がいかに深く恨まれていたかを物語っていたのであり、これに疑念をさしはさむ余地はない。また、これは親ローマ派のサドカイ人支配階級に対するユダヤ農民の敵意の証拠でもあった。この革命に類した抵抗はこの時期にはどんな党派（ゼロテ党）にも組織化されなかったようであるが、その一方では殆どどんな口実でもその抵抗および辛苦を表面化させることが可能な状態であった。これらのユダヤ抵抗者たちが別の反乱の機会を得るのはまもなくのことであった。

反逆者たちをさしあたり鎮圧したうえで、アルケラオスは彼の継承をローマ皇帝に承認してもらうために急いでローマに旅立った。その他のヘロデ家の面々も、その大半が自分たちの要求を競って主張していた。彼らは非常に裕福な家族で、アウグストゥスとの友好関係が長年に亘って築かれており、また、パレスチナを支配する家系でもあった。アウグストゥスは彼らのだれであっても立腹させるわけにはいかなかったため、ヘロデの遺志に関する決定を下すうえで言葉を濁した。

ローマへの道中のカエサレアで、アルケラオスはサビヌスという男に偶然出会った。彼はシリアの財務官であり、非公式なローマ帝国官吏としてユダヤに向かう途中で、ヘロデの全財産を引き継ぐためであることは明らかだった。幸いなことに、シリアの総督ヴァルスはヘロデの旧友だったので、アルケラオスは彼にベイルートから出てきてこの件を解決するよう頼んだ。そしてヴァルスがやって来てサビヌスの活動を禁じ、彼にローマ皇帝の決定を待つよう命令した。その後、ヴァルスはベイルートに戻ったが、何らかの理由でサビヌスをカエサレアに残した。ヴァルスが去るや否やサビヌスはエルサレムに向かい、

そこで宮殿を占有して、様々な砦の鍵やヘロデの台帳・財産目録の提出を要求した。アルケラオスの官吏はこれに従うことを拒否し、彼らもローマ皇帝の命令を待たなければならないことを主張した。

しかし、サビヌスはこれに屈することなく、エルサレムのシリア駐屯隊を使って、神殿の財宝など彼が望むものを力づくで手に入れ始めた。すぐに抵抗の輪が広がったが、この時もまた、ペンテコステ（五旬節）の祭りのためにエルサレムに居た巡礼者の協力があつた。抵抗者たちはサビヌスが居を構えた宮殿を取り囲んだが、サビヌスは報復として軍隊に神殿の攻撃を命じた。再び、何千人ものユダヤ抵抗者が殺され、兵士たちは神殿を略奪した。

これらの出来事はユダヤ人の憤慨を激化させ、ローマ帝国の統制は混乱状態に陥り始めた。多くの地元軍団、この時点までヘロデに忠誠であつた者たちでさえも反乱者たちに加わり、この反乱は稲妻のように国内中に拡大した。ガリラヤに位置する州都セフォリスは陥落し、エリコも陥落寸前まで行った。（ヨルダン川東岸の）ペレアでは一種の偽ハスモン家が勃興して自らを王と公言し、稀に見る成功を収めた常設の特殊部隊を組織した。

この地域の正規政府は明らかに崩壊しており、シリアの総督ヴァルスは秩序を回復して、エルサレムにおいて包囲されているサビヌスの指揮下にある彼のレギオン（軍団）を解放しなければならないと決断した。彼は自分の軍隊とともに大きな騒動が生じている場所へ迅速に展開した。最初はガリラヤに位置する州都セフォリスで、これは若きイエスの居住地ナザレの北方約12マイルに位置する。ヴァルスは激しい戦闘の末、この都市を攻略でき、反乱の首謀者たちをナザレに至る道筋で十字架に磔刑にしてから反乱者たちを奴隷として売った。彼はそれから南方に進み、ヘロデおよびアルケラオスに対する忠誠の中心地であるサマリアに達した。そしてサマリアから、抵抗の兆しを示していた隣接する町を次々と徹底的に破壊して行った。その後、南西方面に展開してエメーアスに達したが、そこではローマ帝国の円柱がペレアからの特殊部隊によって粉砕されていた。エメーアスは敗北をきつし、報復によって全焼した。

この時、エルサレムにはいともたやすく接近できた。同市はほとんど抵抗を示さず、大半の市民は反乱者により自分たちの意志に反することを強要されたと主張した。しかしヴァルスは、ことさら心を動かされることもなく、何千人もの人々を奴隷として売り、投獄したほか、2千人を十字架の磔刑に処した。見る影もなくなったサビヌスは海岸へと隠れ逃げ、それ以降は行方知らずであ

った。ヴァルスはこの時点で、エルサレムに駐留するレギオンを増強し、同市の南方で依然として武装しており、頑強に抵抗していた抵抗運動の中心に注意を向けた。彼らはすぐに降伏し、その指導者は拘留された。ヘロデ家の主だった抵抗指導者は懲罰のためにローマに送られた。

このようにして「ヴァルスの戦争」は終結し、パレスチナは再び平定された。しかし、これはまたもや、ローマ帝国に対抗するユダヤの民族主義がいかに強く、広範囲にわたっているかを物語っていた。

他方ローマでは、ローマ皇帝がパレスチナの分割に関する最終的な決断をしていた。この分割は概ねヘロデの遺志に沿ったものであり、アルケラオスは彼の領土を得ることになったが、「王」の称号は彼がそれに値することを証明するまで認められなかった（これはアウグストゥスに対する彼の忠義を保つためには良い方法であった）。アンティパスはガリラヤおよびペレアの四分領主に、フィリポはガリラヤ湖の東北方面領土の四分領主になった。この領土分割を行なったアウグストゥスの動機は明らかで、兄弟が互いに争わないことを保証する努力を通じて安定をもたらそうとするものであった。ヘロデの死去以来パレスチナで起こった出来事によって、シリアで行なっていたような直接統治を押しつけることが被支配民の民族主義的感情を駆り立て、その結果再び戦争が勃発することになるのをアウグストゥスが確信したのは明らかである。ユダヤ人との戦争を続けても、彼の東方の辺境を維持する目的に資することはなかったであろう。

このようにしてアルケラオス、アンティパスおよびフィリポは「平定された」パレスチナに戻り、彼らの統治を始めることができた。各々が「ヘロデ」の姓を冠したので、福音書の読者が大いに混乱をきたすことになった。フィリポは死去する34年まで、自分の小さな属領を38年間統治した。アンティパスは、彼の妻ヘロディアスの強欲とアグリッパ1世との拮抗が原因で39年に追放されるまでの43年間をガリラヤで統治した。アルケラオスはこれらの兄弟よりもはるかに短い経歴であった。彼は父と同じように残酷な性格であったが、その臣民たちは父ヘロデの死去の際に彼が自分たちに約束したことも、彼らがどうか彼から引き出した譲歩も忘れることはなく、今や彼らはそれ以上の救済を期待していた。しかし、彼らは期待を裏切られることになる。アルケラオスは父と同じように土地の獲得および建設にひたむきであり、荒廃して間もないエリコの平野を復興して、エリコの北方約25マイルのところにアルケレスと

いう新都市を築いた。自分の名にちなんでおり、また、自分のオリーブ園が所在するこの都市には水が必要だったので、彼は隣接する村に供給される水の半分を配分した。しかしエルサレム自体では彼の父が始めた建設作業を中止したので、その結果何千人もの人々が仕事を奪われた。彼の統治の成果は、富裕層をより富裕にし、すでに貧しかった層を極貧にただけであったので、民衆の憤慨は高まっていた。この憤慨はたいへん強かったので、6年にはアルケラオスに反対するユダヤ人およびサマリア人が驚くべき早さで団結し、彼らは合同でローマ皇帝に対して彼を告発した。

サマリア人はアルケラオスに善政を期待した。サマリアはヘロデ家に対する忠誠の要衝であり、彼の母親の故郷であることから、彼らは税の減免を期待し、ここが州都になるのではないかと思っていた。しかし実際は、アルケラオスはアルケレスの建設作業のために増税したため、サマリア人はエルサレムから広まりつつあったユダヤ人の不満、すなわちアルケラオスは臣民を虐待しているという不満を共有することになった。

アルケラオスがローマから戻った後にエルサレムで行なった報復、そして彼が最初の妻マリアーメと離婚し、彼の殺害された兄弟アレクサンダーの未亡人グラフィラと結婚したことから、ユダヤ人は彼を非難した。グラフィラとアレクサンダーの間には3人の子供がいた。ユダヤの「レビレート婚法」によれば、兄弟の妻との結婚が許されるのは、彼らの間に子供がいない場合に限られる。それ以外で婚姻により子供をもうけた場合には、このような婚姻は近親相姦を犯したとみなされていた。アルケラオスがヨアザールを大祭司の地位から解いていなければ、この点に関して何事も起こっていなかったであろう（アルケラオスがローマに行く前に反乱者たちはヨアザールの罷免を要求していたが、その時アルケラオスはこれを拒否し、神殿での反乱者の殺戮につながった）。この大祭司を罷免された人物は今や反乱者たちの側につき、アルケラオスは道徳的に退廃しているという非難を倍加させた。

アウグストゥスがユダヤ人およびサマリア人の共同声明を受け取ってから、アルケラオスをローマに召還した。彼は簡単に取調べを受けた後で、ローヌ川沿いにウィーンへと追放され、彼の財産は没収された。それから8年後にアルケラオスは死去した。

## ユダヤにおける直接統治

この時点で、ローマ帝国はユダヤを皇帝直轄属州とすることに決めた。これは、ローマ帝国の文官職プロキュラトル（皇帝の代官）の支配下で行なう直接統治の一形態である。ローマ帝国の属州の主要な機能は、ローマに進貢することであった。

プロキュラトルの主な役割は、これらの税を徴収し納めることであった。これから必然的に派生する役割は、課税対象となる所得と納税者の正確な査定である。したがって、ローマ帝国がある州を支配するときにはいつでも人口調査を行なった。このような調査はローマ帝国がユダヤを属州として支配した時にも行なわれた。聖ルカはこれを「第一次人口調査」と呼んでおり、キレニウスがシリアの総督であった時に実施された。彼はこの「第一次人口調査」をイエスの生誕と関連づけているが、実際に行なわれたのは6年のことであり、この時イエスはすでに10才ないしは11才であった。しかし、シリアの財務官サビヌスがヘロデの財産を接收しようとした際に、彼がプロキュラトルに任命されることを想定して人口調査を行なった可能性もある。しかし、その当時のシリアの総督はヴァルスであった。ルカはこれら二つの「人口調査の勘定」の可能性を混同したように見受けられる。

納められるべき租税は多かった。まず、土地税があり、それから「貢納」あるいは人頭税があった。これらはローマ皇帝の偶像が刻印されているローマ硬貨でローマ人の徴税者に納められなければならなかった。硬貨にあるローマ皇帝の刻印はあらゆる敬虔なユダヤ人に延々と嫌われたが、それはいかなる生物の偶像も作ってはならないとする第二戒律を破っていたからである。第三の租税には *annona*、すなわちトウモロコシおよび牛による年貢があり、これはローマ帝国軍の食糧の一部として役立った。第四に、一連の租税全体を集合的に *publicum* と呼ぶものがあつた。これは、売上税、関税、奴隷を自由にする際の手数料、公共財産の使用権、塩の採掘に関する税などである。この *publicum* の徴税は非常時に不当な利得を得た者の小規模な会社に委託され、その代理人は *publicans* と呼ばれるようになった。彼らの多くは地元の住民であつた。これらの租税はローマ帝国によって決められ、同国に直接納められたが、隷属のしるしであり、被支配民の憤慨が極みに達した状態が続く原因として少なからぬ役割を果たしていた。

#### ユダヤにおけるユダヤ人の党派

政治的な話に進む前に、ここでユダヤが属州になった時代の同地における政治的な集団の形成を見ておくことが多分必要であろう。

## 1 サドカイ派

サドカイ派は約200家族から成る世襲制の貴族政治を形成し、これらの家族の中から大祭司が輩出した。ハスモン王朝が没落した後は、彼らが大きな権力を握っていた。しかし、ポンペイウスおよび後のヘロデは、一連の処刑によって彼らの数を減らし、サンヘドリン（最高法院）の地位に任命することで彼らの反乱の可能性を減じた。ヘロデは彼自身が大祭司を任命する権利をも有した。

サドカイ派は伝統主義者で、信念よりはむしろ出自がサドカイ派であることを決定した。彼らは神殿、それゆえあらゆるユダヤ人による献納の金庫も管理した。彼らはまた、神殿でローマ貨幣をユダヤ貨幣に両替するという実入りの良い商売も行なったので、巡礼者は供犠のための動物を購入できた。こうして彼らは大富豪となり、そのため自分たちの運命に甘んじたのは自然なことであった。自分たちの階層自体の利益に照らし合わせれば、彼らが親ローマ的となるのは必然的であり、激的な反民族主義者であった。彼らにとって、ファリサイ派の宗教的専心や新しく流布している復活についての教理に関心を向ける時間は少しもなかった。

## 2 ファリサイ派

ファリサイ派はハンディズム（「義のある」を意味する）から生まれ、彼らは紀元前2世紀末にハスモン家を援護するうえで自分たちを組織化した。彼らは民族の精神的エリートを自認し、その起源は政治的な革命を目指した人々であったことは疑いようもない。彼らはその教えにおいてトーラー（モーセ五書）に関する精緻な形式尊重主義を発展させる一方で民族主義者でもあったが、その民族主義は経済面よりも宗教面で一層動機づけられたものであった。彼らは確かにローマ硬貨や国内に割礼をしていない兵士が多く存在していることに激怒した。彼らはこれらの兵士と肩をすり合わせなければならず、これによって儀礼的に不浄な状態になった。ヨセフスが言うように、彼らはユダヤ国家を建設することで同地に神権政治を確立したかった。

このような種類の宗教的動機による民族主義はより世俗的な革命民族主義を包含する方向に容易に転換しうるのは明らかである。ファリサイ派がヘロデの死に伴って生じた騒ぎに主導的な役割を果たしたことは疑いようもない。また、

著名な歴史家ヨセフスがファリサイ人であり、ユダヤがローマ帝国と交戦中であった67年にエルサレムでガルス率いるローマ軍が敗退した後、ガリラヤの革命政府の首脳に選ばれたことにも疑念をはさむ余地はない。もともと、ヨセフスは後にガリラヤが陥落してから熱烈な親ローマに転向した。

ファリサイ派はユダヤ教の敬神およびシナゴグの中心としてトーラーに焦点をあてたので、その出現は神殿と供犠祭式中心の従来型とは別の形態のユダヤ教として多くの人々に受け入れられた。神殿税とローマ帝国の課税という負担が重なっていたことから、多くの農民は神殿を中心とするユダヤ教の伝統的形態から疎遠になっていった。当時においては、革命を目指す人々の何人か（決して大半ではない）はファリサイ派から出た。しかし、ファリサイ派は民族主義に宗教的な正統性を与えたことから人気があった。

### 3 エッセネ派

エッセネ派はキリスト教の発展を理解するうえできわめて重要であるとしても、政治的な重要性はほとんどない。彼らは世間から遠く離れて共同生活様式を発展させ、そこで聖書を研究し、清らかで無欲の、そして謙虚な生活を送った。重要なことは、このユダヤ教の宗派が「義の教師」であるとともに「トーラーの解釈者」であるメシアが現われることを期待していたことである。これらの修道士が到来するメシアを強く信じ続けていたならば、ましてやファリサイ派およびその信奉者たちはどれほど信じていたことか。しかし、エッセネ派のメシアは「トーラーの解釈者」であるという事実から、彼らがファリサイ派と緊張関係にあることを認めていたのは明らかである。なぜならばトーラーの解釈がファリサイ派の主要な役割であったからである。

エッセネ派がどのように政治に無関心であったかを判断するのは難しい。われわれが確信を持って言えることは、67年のガルスの敗退後に革命政府が打ち立てられた際に、エッセネ派のヨハネという人物がエメーアスからヨッパまでの西域をまかせられたということだけである。

### 4 彼の地の平民

初期の頃は、平民は革命党派と呼ばれるのに相応しい組織が形成されることはまずなかった。組織化した最初の集団としてゼロテ党が歴史に登場するのは66～70年のユダヤ戦争の間だけであり、それからエルサレムの反乱者たちにこの名があてられているだけである。これらの出来事を記録しているヨセフスは確かにガルスの敗退後に革命側の統治者となり、それゆえ反乱者たちの味

方であったに違いないが、彼は自らをゼロテとは呼ばなかった。これはもちろん、彼がユダヤ戦争の歴史をようやく書いたのが、自らの支持対象をローマ人に変え、新ローマ皇帝ティトゥスの親友になった後のことであったからかもしれない。ゼロテのシモンと呼ばれたイエスの弟子がゼロテ党の成員であったか否かについて答えるのは難しい。このような党派がイエスの存命中にあったかどうかは分からない。しかしもちろん、マルコ福音書やQ資料が書かれた時までには彼がゼロテ党の成員になっていて、そしてこれが特徴的な呼称として現在使われているという可能性はある。ユダヤ戦争におけるゼロテ党の役割について知っていることを前提にすれば、もしアラン・リチャードソンが示唆するように（*The Political Christ, SCM, pp41ff.*）、その呼称がシモンは熱心（熱狂的）であるという以上の意味をもたないのであれば、そんなに重要な呼称が彼に使われたということは到底ありそうもない。

ゼロテ党がいつ、どのように反乱組織へと組織化されたのかは分からない。しかし分かっているのは、ユダヤ人の大多数がローマ帝国の支配、ユダヤ人の属領主となったヘロデを通じたローマ帝国の支配さえ、これに強く憤っていたということである。彼らは貧しく、しかも抑圧されていた。彼らの憤慨はその支配者の独裁的な権力により、その時代の大半において抑えられていた。しかし、この憤慨は決して絶えることはなく、ファリサイ派はそれを存続させるうえで少なからぬ役割を果たした。というのも、彼らのシナゴグの教えでは、ユダヤ人は神の約束の地に住む神の自由な人々であったからである。この約束の地では神が唯一の王であった。しかし日常の経験が教えることによれば、ユダヤ人は奴隷であった。また、ファリサイ派は儀礼的に清らかであることの必要性も強く説いた。しかし日常では、ユダヤ人はローマ硬貨に手を触れ、非ユダヤ人の兵士および文官と肩をすり合わせることで儀礼的に清らかではなくなった。もし彼らが組織化されていなければ、機会さえ与えられればどんな場合でも、ほとんど自発的に反乱を起こしていたであろう。サドカイ派、ファリサイ派、あるいはエッセネ派というよりは、むしろこの階層の人々こそが、ローマ帝国植民地で騒ぎが断続的に発生した責任を負ったのである。また、この集団の人々こそがナザレのイエスの主要な聴衆や信奉者を形成していたのである。彼らが自分たちの政治状況に気づいていなかったということは決してない。

このような記述から、あらゆる農民が小さな村に住んでおり、毎日彼らの土地を耕しに出かけていったと仮定するのは適切でない。多くの農民はその通り

であったが、われわれが見てきたように（「古代ローマの政治経済におけるパレスチナ」に関する私のエッセイを見よ）、多くの農民が税負担ないしは支配エリートによる彼らの土地の着服によって彼の地を去った。彼らのうちのある者は、ファリサイ派およびエッセネ派から広まる新しい宗教的な教えの影響下で形成された、より敬虔な宗教集団の流浪する一行に加わった。また、ある者は山賊ないしはゲリラ戦士の一団とでも呼べるものに加わった（どの語を使うかは読者の政治的観点によって決まる）。

しかしその他の者は、泥棒、強盗および庶民から全般にわたって略奪する者の徒党集団を形成して徘徊した。そして多くの人々が乞食に身をやつし、この身分の人々は膨れ上がっていた。農民層は雑多な人々から成っていたのであり、当時のパレスチナにおいてこのような変化をもたらした根本原因は土地の移転にあった。

ジーザス運動を解釈する試みにおいては、イエスの時代には彼らもまた、上述のような類のどれかの流浪集団であったことを決して忘れるわけにはいかない。そのようなものとして、彼らはパレスチナ社会のまさに最底辺の層に属していたのである。

これが紀元前6年以降数年間のパレスチナであった。

#### ユダヤと最初の4人のプロキュラトル

アウグストゥスは6年、コポニウスという人物をプロキュラトルに任命したが、人口調査はシリアの総督キレニウスに委託した。その調査の実施により、もう一つの反乱が発生寸前の状態にあった。今回、それは大祭司ヨアザールによってかろうじて食い止められた。彼はヘロデに任命されたもののアルケラオスによって罷免されたが、当時は再任されており、筋金入りの親ローマ派であった。彼は今にも勃発しそうな反乱に対しその危険性を削減する努力をしたが、ファリサイ派のヒレル学派が人々に壊滅的であったヴァルス戦争を思い起こさせることに助けられた。より戦闘的なファリサイ派の激しい擾乱によっても反乱は起きなかった。ヒレル学派のライバルであったシャンマイ学派の二人のファリサイ人は、「課税は奴隷制度の導入よりましだということはない」と公言し始め、ユダヤ人民に自らの解放を強く主張するよう熱心に勧めた。多くの学者の考えによれば、これら二人のファリサイ派（ガリラヤのユダとサドク）こそが、ユダヤ戦争（66～70年）で大変重要な役割を果たすことになるゼロテ

党を創設した。ヨセフスによれば、全民族が「これら二人の教理に信じられないほど冒されて」いた。いずれにせよ、彼らの最初の成功は、罷免され再任された大祭司ヨアザールが気の毒にもキレニウスによって再び解任されたことである。キレニウスは、人口調査を自分のために役立てようとしていた、まさにその男である。彼にとって調査は完了しており、次の課題は反乱を防ぐことであつたので、より民族主義的な分子に対して見せかけの態度を示すことでこれを実現しようとした。ヨアザールは平和の代償としては小さなものに過ぎなかつた。

コポニウスがユダヤの最初のプロキュラトルとして着任してから3年後の9年に、彼は罷免され、その代わりとしてマルクス・アンビブルスという人物がプロキュラトルとして赴任した。彼は11年までしか続かず、次の第三代プロキュラトル、アンニウス・ルフスも14年までしかもたなかつた。ルフスのプロキュラトル在職時における唯一の特記事件は、その末期にアウグストゥス皇帝が44年間にわたるローマ帝国支配の後に死去したことぐらいであろう。アウグストゥスの後継者は彼の養子となつた継子ティベリウスであつたが、彼はその時56才であつた。

ティベリウスはヴァレリウス・グラトスをユダヤのプロキュラトルに任命し、彼は27年にポンティウス・ピラトに代わるまでプロキュラトルの地位に留まつた。ヴァレリウス・グラトスは、その初期においてローマへの忠義が確固とした大祭司を見つけようとしたが、それほど成果は得られなかつた。彼の試みはたいして成功せず、グラトスは15～18年にかけて3人の大祭司を任命しては罷免した。そして18年にカヤパが任命されたが、彼はローマへの忠義を十分に尽くしたので36年まで大祭司を務めた。

### ポンティウス・ピラト体制下のユダヤ

親ローマ派のカヤパがエルサレムの大祭司であつた時に、ポンティウス・ピラトがカエサリアに赴任してプロキュラトルとしての任期が始まつたが、それは洗礼者ヨハネおよびナザレのイエスといった聖職者が現われる直前のことであつた。ピラトが直面せざるを得なかつたユダヤではおなじみとなつた問題すべてに加え、彼はヘロデ・アンティパスが引き起こしていたガリラヤのユダヤ人の激しい憎悪にも対処しなければならなかつた。イエスが彼を「あの狐」(ルカ福音書13.32)と呼んだのはいわれの無いことではない。ティベリウス皇

帝に取り入ろうと決心して、アンティパスはガリラヤ湖南岸に建設した新都市をティベリアスと名付け、ここにセフォリスから遷都した。しかし彼はこの都市を旧墓地の上に建設したので、敬虔なユダヤ教徒にとって訪問するのがはばかれる禁制の都市となった。このようにユダヤ人をその属領州都から狡猾に排除したことで、ユダヤ人の激情が高まった。政治的な関心よりも聖書研究上の関心を一層多く集めるのは、ユダヤの前史における彼の兄弟アルケラオスのように、アンティパスが自分の異母兄弟の妻ヘロディアスと恋に陥ったという事実である。互いに結婚することを決心してから各々がその配偶者と離婚し、27年頃にはユダヤ律法を破廉恥にも犯して結婚を成就させた。この婚姻こそ、あらゆる敬虔なユダヤ人と同様、洗礼者ヨハネがきわめて徹底的に糾弾したことであった。彼の民衆への影響力が大きいために、アンティパスはヨハネによるこの婚姻への反対を黙認することはできなかった。ヨハネはまず、その属領からローマ領のサマリアに追放され、そこで聖職を続けた。彼がガリラヤに戻ると、アンティパスは彼を拘留し、処刑した。

したがって、ピラトが27年に赴任した時にはユダヤ人の激情は非常に高まっていた。平和を維持するには優秀かつ強力な外交官が必要であったが、福音書およびユダヤ人哲学者フィロンの両方によれば、ピラトは弱く、しかも残虐であった。

ピラトはユダヤ人の憤慨を鎮めることにひどく失敗した。彼が赴任してまもなく、自分の軍隊をカエサレアからエルサレムへと冬営地に送る時期が到来した。その軍隊はローマ皇帝の偶像が入った軍旗を掲げて移動した。当然のごとくユダヤ人はこれに抗議したが、ピラトはローマ皇帝を侮辱すること、あるいは軍隊の不興を買うことを欲しなかった。5日間の論議の後、ピラトは大規模な兵士の配置に支えられてユダヤ人を呼び集め、彼らにエルサレムで軍旗を受け入れるように要求した。これに対して、ユダヤ人たちはただ首を伸ばして処刑を求めた。これはピラトの手に余ったので、その命令を撤回した。

それほど軽々しくは罷免されないように、ピラトは再びローマ皇帝の機嫌を取る必要性を感じた。そのため、彼はユダヤ人を立腹させるような偶像は一つもないように、単にローマ皇帝およびピラトの名前が入った黄金の盾を神殿に建立した。ローマ帝国への反感は当時、非常に強く広まっていたので、これさえもユダヤ人にとっては受け入れがたいということが分かった。この行為の結末を恐れたサンヘドリンの行政官長たちは、ヘロデの残りの息子たち（すなわ

ちヘロデ・アンティパスおよびヘロデ・フィリポ)との合同派遣団を形成して、憤慨の種になる黄金の盾を除去するようピラトを説得した。しかしピラトは、非常に良い理由で彼らとの議論には心を動かされず、彼らの要請を拒否した。それゆえ嘆願者たちはローマ皇帝自身に対し、この行為の起こりうる結末を警告した手紙を送付した。ヘロデ・アンティパスがティベリウスの親友であったことがおそらくは影響して、この皇帝はその盾を撤去し、カエサレアにあるアウグストゥスを奉った寺院に建立するようにピラトに対して命令する決定を下した。再度ユダヤ人は勝利し、今や屈辱を味わったピラトはサンヘドリンとヘロデ派を個人的な敵に加えなければならなかった。

それ以降、ピラトはユダヤ人の目からはなにも一つ正しいことをしなかった。ピラトは彼らの歓心を買おうとしてエルサレムにまで新しい水道橋を建設して、同市の水供給を改善した。しかし、彼はそのために神殿の金庫から資金を流用したので、再びユダヤ人が渎神行為として彼を非難した。今回はピラトは力に訴え、示威行動参加者を棍棒で武装した兵士によって包囲した。多くの人を負傷し、何人かは殺害されたが、この時はローマ皇帝への嘆願は無かった。これによって自信を得たピラトは、再び暴力を用いて神殿における潜在的な暴動を終息させようとした。ルカ福音書13:1によれば、このとき虐殺された人々は彼らの供犠を実際に行なおうとしていたところであった。これらの拝礼者たちはヘロデ・アンティパスの管轄下のガリラヤ人であったので、この事件はピラトとアンティパスの間の亀裂を広げることになった。アンティパスがユダヤのプロキュラトル職に目をつけていたのは疑いようもなく、彼がこの任に就くことができれば彼の父親ヘロデの支配下にあった領土の大半を統治することになるはずであった。

この野望がアンティパスに最終的な破滅をもたらすことになったが、この局面ではサンヘドリンがポンティウス・ピラトに対抗するアンティパスを支援する用意があったかのように思われる。サンヘドリンもアンティパスも親ユダヤの民族主義者ではなかった。彼らはピラトよりはアンティパスという人物を通じたローマ帝国の支配を欲し、ピラトを当惑させることで彼らができることは何でもやった。しかし、ピラトの没落の原因となったのは彼らではなかった。

イエスの死後、サマリア人こそが再び本編に登場し、ピラトを罷免させることに成功する。一人の熱心なサマリア人民族主義者がサマリア人の群衆を彼らの聖山であるゲリジム山に呼び集め、モーセがそこに埋めたと彼が主張する聖

なる船を彼らに見せることを約束し、そうすることでこの山がモーセの真の信奉者全員が崇拜すべき場所であるという信念を打ち立てたのは明らかである。ピラトは騒ぎの臭いをかぎつけて彼の騎兵隊を投入し、多くの人々を惨殺、あるいは投獄した。激怒したサマリア人はシリア総督ヴィテリウスに訴えた。彼はこの時までにはうんざりしており、彼の軍隊を投入して秩序を回復し、ピラトをティベリウス皇帝の元に送って不名誉な報告をさせようとした。ローマに到着する前にティベリウスは死去したものの、ピラトはそれほど長くは生き長らえなかった。いくつかの報告によれば、彼は新皇帝カリグラの逆鱗に触れるよりも自殺を選んだという。

この急激に拡大した恒常的な不穏状態が、ナザレのイエスが聖務をおこなった時の状況である。それはまた、喩え話を生んだ状況でもあった。この時期、そしてそれ以降70年にエルサレムが略奪された時までの時期を通じ、この社会不安は自分たちの状態が奴隷と変わらないとみなしていた庶民に壊滅的な影響を及ぼす経済的負担から主として起こった。ファリサイ派の宗教上の教えがこの憤慨を高めるのに役立ったのは明らかである。ローマ帝国の行動がまるでこの憤慨をあからさまな暴力に激化させるかのように見えたとき、親ローマ派のサドカイ人やヘロデ派さえも自己利益につながるとみなした場合には、ピラトのような男に対抗する行動を取ったものである（つまり、政策の変更というよりも指導者の交代）。同様に、ローマ帝国という共通の敵によって、6年におけるアルケラオスに対抗する共同行動が示しているようにユダヤ人とサマリア人は団結することができた。あるいは、彼らはローマ帝国の文官の一人（ピラト）に対抗して別々の行動を取ることができた。

### イエスの死と福音書の著者たちの政治

イエスの死について誰を責めなければならないのかを現時点で判断するのは並外れて難しく、それを追求するにはわれわれが持てる以上の時間が必要である。しかし本論の目的にとっては、次の点に触れることで十分である。すなわち、神殿の黄金盾の事件から分かるように、ピラトの威信をローマ皇帝の面前で失墜させる陰謀にサドカイ派、ファリサイ派およびヘロデ派が関与するようになったということが、確かに可能であったということである。この科はピラトがおそらく何よりも恐れていた。同時に、彼は潜在的な反乱者、特に厄介な宗教的反乱者に対して無情な残虐さでもって対処することができ、そして実際

に行なった。水道橋、神殿でのガリラヤ人の虐殺およびゲリジム山上のサマリヤ人といった出来事は、これを十分に証明する。また、ユダヤ人はローマ帝国の支配下にあっても、彼ら自身が死刑を科すことができたし、おそらく実際にも行なったであろう。福音書の中で十分頻繁に記述されているのは、ユダヤの宗教指導者はイエスを石打ちの刑に処したかったこと、また、彼らが捕えていた姦通行為をした女性にまさしく同じことをしようとしていたことである。

この最後の可能性については、イエスはユダヤ人の石打ちの刑によってではなく、ローマ人による十字架の磔刑によって死んだので、これを除外しなければならない。残りの二つは、聖書学者によって激しく討論されてはいるが未解決の可能性である。アンティパスに味方してピラトを追い払い、それゆえ断固として親ローマのヘロデ家による支配を復興させるといふ、サンヘドリンおよびヘロデ支持派間の陰謀の担保としてイエスは利用されたのか？そうであるとすれば、彼らはピラトの弱点につけこみ、「ユダヤの王」を名のって民衆に人気のあるメシア信仰者を立てて、ローマ皇帝に対してピラトが忠義をなくしていることを示そうとする策略をめぐらしたのである。

これが、イエスがローマ帝国の支配に対する脅威であるという疑いをやっきになって晴らそうとする福音書の著者たちの標準的な方針である。ギリシア正教会およびエチオピア教会はこの説の極端な形態を依然として保持している（すなわち、イエスおよびピラトの両方がヘロデ派の政治的戦略の不運な担保であったということ）。これらの教会は、ピラトとその妻がキリスト教徒として死んだということを主張するうえでオリゲネスおよび聖クリュソストモスの伝承を奉じ、今もって彼らを追悼する日を設けている（ギリシア正教会は10月27日、エチオピア教会は6月25日）。聖書学者たちは近年、このヘロデ派の策略という説について激論を交わしており、これが決して裏づけられるものではないことを示してきた。

このヘロデ派謀略説に対抗するのは、イエスのメッセージが民衆の民族主義者的感情を高揚させていたことから彼がローマ帝国支配の脅威であるということ、ピラトが正しく見据えていたという説である。ゲツセマネの園でイエスが秘密裏に武装勢力に捕えられ、その時彼の弟子たちはあきらかに武装していたこと、そして彼がローマの手にかかって暴力的に十字架の磔刑に処せられたことを根拠に、ピラトはイエスの死のきっかけを作った人物であるとともに加害者であるという主張である。さらに、ヘロデ派の謀略はキリスト教の福音を

ギリシア人やローマ人に推挙するための初期のキリスト教団の創作、すなわちマルコ、ルカおよびヨハネの福音書の中での創作であったと主張する。これはまた、エルサレム教会のために書かれているマタイ福音書の目的にも適っていた。というのも、マタイは70年のエルサレム陥落後のファリサイ派の神学に単純に従っていたからである。神殿が略奪されるとともに、サドカイ派の役割はユダヤ人の生活からあっさり消滅し、彼らも歴史の舞台から消え失せる。しかし、トーラーおよびシナゴグでのトーラーの教授はほとんど衰えることがないままであった。ヤハウエの普遍的な王権およびトーラーの要請は、ユダヤ人がいるところではどこでも公然と褒め称えられた。このため、彼らは実際上、神政国家あるいは神殿を必要としなかった。これもまた、マタイ神学であり、マタイ福音書においてのみキリストの普遍的君主権、すなわちトーラーの成就が述べられている。キリストの支配は地上の王国を必要とせず、それゆえ彼は何らかの民族主義者の大義に関与していたからではなく、ヘロデ派が共謀して捏造した反ローマ帝国活動のかどで死んだのである。

ヘロデ派の謀略の起源についてのこれらの主張が示すのは、新約聖書の政治はイエスの死、およびそれに続くピラトの罷免で終わったのではないということである。誕生したばかりのキリスト教団は、エルサレムの陥落を招いたユダヤ民族主義者の戦争（66～70年）に先行する、信じがたい動乱の時代を生きたのである。ヘロデ大王の孫、アグリッパ1世の体制下では、比較的平穏な時期が短いながらも3度あった。

アグリッパ1世は、ローマ人とユダヤ人に信頼の厚い狡猾な政治家であった。彼の下でヘロデが支配していた全地域が再び統一され、彼が王となった。しかし、44年における彼の早すぎる死はその属州を席卷することになる嵐を引き起こした。

不幸にも、この時期における初期のキリスト教団の役割については実際のところほとんど分かっていない。唯一、非常に簡潔な、興味をかきたてられる手掛かりがあるだけで、これは彼らの政治的な結託について信頼のおける主張を築くにはあまりにも乏しい根拠である。われわれに可能な最善策は、ヨセフスの経歴をごく簡潔になぞって、当時におけるユダヤ人の政治的忠誠がどのように揺れ動き得たのか、また揺れ動いたのか、そして70年にユダヤ人の抵抗が崩壊したことがいかに決定的であったかをただ確かめることである。

ヨセフス自身の記述によれば、彼はたいへん若かった頃でさえ早熟な

聰明さを示していた。彼は当時の三大宗教団体を試してみ、エッセネ派に強く惹かれたのは明らかであり、同派の中で衣食を自然に依存した、困難かつ清らかな生活を3年間送った。19才になると砂漠を離れエルサレムに戻り、ファリサイ派に加わった。26才の時には微罪で拘束されていた知り合いの司祭二人を擁護するためにローマへ行ったが、そこでネロ皇帝がキリスト教徒に罪を転嫁させた64年の大火に遭遇した。ヨセフスが66年の春にエルサレムに戻ったときにはユダヤ戦争が勃発していた。ヨセフスの記述によれば、彼はユダヤ人の宗教的独立というファリサイ派の要求を支持する一方で、革命には反対していたと主張している。彼の意見では、ローマに支配された世界におけるユダヤの政治的独立は幻想であり、革命は彼の仲間の民衆が完全に隷属する状態を招くにすぎない。もしこれが当時の闘争におけるヨセフスの立場を正確に説明しているならば、彼は手のひらを返すように立場を変えることになる。

革命が勃発したとき、シリア総督ガルスはこれを鎮圧するため迅速な行動を取ろうと決心した。彼は自分の軍隊を召集し、破竹の勢いで勝ち進みながらエルサレムまで進軍した。その時にこの都市を奪取しようと思えば明らかにできたであろうが、何らかの奇妙な理由でそれを躊躇し、冬の到来まで都市城壁の外側で野営した。それから彼は攻撃を中止して撤退し、春の到来を待つ決定を下した。これは、エルサレムにいたゼロテ党にとっては奇跡的な無罪放免であり、彼らはどっと繰り出して撤退中の軍隊を追いかけ、山や丘陵からの一連のゲリラ襲撃で彼らを敗走させた。

エルサレムでは、凱歌を挙げた反逆者たちが敗北したローマ帝国の権力に代わる正式な政府の樹立に取り掛かった。そして大祭司アナヌスが総指揮官に任命され、ユダヤは6行政区に分割された。当時30才になっていたヨセフスはガリラヤの革命政府行政官に任命された。彼は即刻、管轄下にある町の防備を固め始めるとともに、10万人の軍隊を組織してローマ軍を手本にして訓練を施した。彼は内面の葛藤もなく、断固とした（そして時には暴力的な）行動を取って、敵対者を寄せつけずに同地で彼の統治を確立することができた。

大きな騒乱が生じたのは67年に、ネロ皇帝がユダヤの革命を鎮圧するためにウェスパシアヌス（後のローマ皇帝）をローマ軍の指揮官として送り込んだ時である。指揮官としてのウェスパシアヌスをその27才の息子ティトゥスが見事に補佐した（ティトゥスもローマ皇帝となる運命にあった）。ウェスパシアヌスはごく当然のようにガリラヤから軍事行動を展開して、ヨセフスによって

築かれた防衛線の突破に着手し、最初の大きな作戦をセフォリスの北方9マイルにあるヨタパタに対して行なった。他方、ヨセフ自身はティベリアスから現われ、その防衛を指揮した。ヨタパタは47日間にわたるすぎまじい攻撃に耐えたが、ついには一人の脱走者が要塞の反逆者たちを裏切ったため、ティトゥス率いるローマ軍はその要塞への侵入が可能となり、そこで4万人の反逆者たちを殺害した。

ヨセフスは40人の貴族とともに洞窟に逃げ込んだ。この時は一人の女性が彼を裏切り、その隠れ家を暴露したので、ウェスパシアヌスは二人の士官を送って、ヨセフスが投降すれば生命は助けることを彼に申し出た。しかしヨセフスはこれを拒否し、彼とその一団は自殺を企てた。ヨセフスによれば、彼らは互いに殺し合う順番のくじを引き、ヨセフスが最後を引きあてたようであるが、彼は自身も殺すはずであった男も手にかけることはなかった。彼ら二人は洞窟から現われてローマ軍に投降すると、ヨセフスはウェスパシアヌスは皇帝になると本人に預言したことを彼自身が述べている。この預言をした結果、彼はウェスパシアヌスに優遇され、非常に長く続くことになるティトゥスとの友情が築かれた。この時点からヨセフスは熱心な親ローマ派となり、彼のユダヤ人に関する著作はすべて二つの事を主張し始めた。すなわち、(a)ローマ帝国の博愛および(b)ローマ帝国に対するユダヤ人の忠誠である。

エルサレム陥落後のヨセフスの政治的立場は決して珍しいものではない。それはかなりの間にわたり、ほとんどおしなべてファリサイ主義を取っていた当時のユダヤ人の主要な立場となった。ファリサイ派はユダヤ教の精神を脈脈と伝えており、ヤムニアではファリサイ派のみから成る「大サンヘドリン」が設立され、ローマ人はこれをユダヤ人民を公式に代表する機構とみなした。比較的平和な時代が40年近く続いたが、世紀末前後になるとローマ帝国の抑圧とユダヤ人の抵抗が再び顕著になった。ハドリアヌス皇帝が130年にエルサレムの廃虚に非ユダヤ教徒の都市を、そして彼自身とユピテルの偶像を冠したユピテル神殿を建設しはじめた際、ユダヤ人の激情が再び暴動に発展した。この時の革命はシモン・バル・コクバに率いられたものであった。

この革命では、シモン・バル・コクバはユダヤ教の非常に著名なラビの一人であるアキバから積極的な支援を受けた。彼はコクバをメシアとして受け入れ、その革命に加わった。激しい戦闘の後で革命は鎮圧され、アキバ自身はローマの手によって火あぶりの刑に処せられた。この革命は135年に終焉を迎え、

その結果ユダヤ人民はローマ帝国全土に離散して、パレスチナにおける故郷を事実上喪失した。

## 結論

こうして、紀元前63年に始まったローマ帝国のパレスチナ支配により、2世紀後の135年には最終的にユダヤ人が離散する結果となった。この期間全体を通じてユダヤ人の反乱が勃発寸前の状態にあり、その中で骨の髄までファリサイ派であった聡明なヨセフスやアキバのような稀に見る著名人さえもが、あるときは反乱者とともに戦うが次の瞬間にはローマ帝国の博愛的支配を擁護するといったことが起こりえたのである。もし、彼らのような偉大な思想家や経験豊富な指導者がその政治的忠誠を方向転換することがあるのであれば、ましてやイエスが語りかけた普通の人々、そしてイエス・キリストの生涯を記録するようになった男たちはどれほど揺れ動いたことか。

そしてこれが、イエスにより語られたり、それから初期の教団に記憶され用いられた喩え話の政治的情況である。この点を踏まえれば、次の課題はいくつかのイエスの喩え話についてその政治的な含蓄をいくぶん暫定的ではあっても思索することである。その方法としては、喩え話を少数選び、それをある程度詳細に検討することになろう。これは全くと言っていいほど未開拓の分野なので、大きな限界の中で始めるしかない。

(欲しい方に無料の印刷物を送る。)